



私は子どもの頃から理科が好きでした。特に工学系が好きでしたが、「色盲・色弱なので理科系には進学できない」と言われて育ちました。それでも理科系の本を読みあさり、部屋は実験装置であふれ中学の頃には飛行機やバイクや無線機を作るようになりました。高校の時に転機がありました。となりの高校の物理部がテレビで筋ジストロフィーの子どものためにリサイクル部品で電動車いすを作っていました。私は頭が真っ白になり感動して会いに行きました。科学技術はそういうものに使うべきだろうと目覚めたのです。

ちょうど小さなコンピュータが登場してきたので、コンピュータを使っていろいろな人のさまざまな苦手を克服する技術の普及を仕事にしました。私は自分自身の色の見え方と自分たちが置かれた境遇について、科学的な立場から話せるようになりたいと思い、色彩学を学びました。あまりに色弱のことが知られていないと感じていたのです。そして2004年仲間とともに社会の配色を変えるためのNPO法人カラーユニバーサルデザイン機構（CUDO）を設立しました。

色弱について知ってほしいこと

色の見え方が異なっている人が人類全体の5%くらいいることはあまり知られていません。実は眼科によって日本人では男性の5%が生まれつき色覚が異なるとされています。私もその1人で、青と黄色は正反対の色に感じますが、多くの人が正反対に感じている赤と緑が同じような色に見えます。また青緑やピンクは灰色に感じられます。そして多くの人が使う色の名前前で伝え合うことができません。辞書に載っているすべての言葉を理解できても「その赤いの取って」「何色のファイル？」という色の名前はまったく理解できないのです。みなさんには「赤外線の色」「紫外線の色」「レントゲン線の色」が理解できますか。それと同じことなのです。見えない色、見分けられない色は理解できないのです。



『色弱が世界を変える』
伊賀公一 著
太田出版
本体1800円+税

誰にでもわかりやすい色の 社会に変える

色弱の1級カラーコーディネーター
カラーユニバーサルデザイン機構 副理事長 **伊賀公一** さん

問題は、そういう私たちのような人がたくさんいるということが知られていないことです。そして、多くの場合白黒世界なのだろうと誤解されていたり、自動車免許が取れないのだろうとか、お医者さんにはなれないのだろうという誤解を受けていますが実際には、飛行機、大型船舶、鉄道の運転免許と警察官採用に制限がある程度です。ほかの仕事に制限はほぼありません。いろいろな業種でプロとして活躍している人はたいへん多いのです。

安全で暮らしやすい社会のために

CUDOではさまざまな製品や印刷物の配色を実際に色弱の人も参加して決めています。そうすれば誰にとってもわかりやすい色になり、安全で暮らしやすい社会になるのです。

2018年4月JISZ9103安全色が改訂されました。私は委員として改訂に加わり、世界で初めてユニバーサルカラーを採用した配色として改訂することができました。2020年に向けて日本のサインの色はこの安全色を元に配色されてゆくでしょう。そして日本から世界にカラーユニバーサルデザインは進んでいくことでしょう。

いが こういち/カラーユニバーサルデザイン機構（CUDO）副理事長。
CUDOは2004年社会の配色環境を人間の多様な色覚に合わせてものに変えることで誰もが安全で安心して暮らせる社会をつくる目的で設立されたNPO法人。2008年バリアフリーユニバーサルデザイン功労者総理大臣表彰を受賞。企業や自治体などの配色コンサルティングを年間約700件指導。学校や各団体向けに色覚の多様性に関する講演活動などを実施している。